

ベ
ン
ド
・
ア
ン
ド
・
ス
ナ
ッ
プ
屈服すると見せかけて素早く反撃

—ロバート・ルケティックの『キューティ・ブロンド』における「ダム・ブロンド馬鹿な金髪美人」という戦略

藤 田 秀 樹

富山大学人文学部紀要第 69 号抜刷

2018年8月

ベンド・アソップ 屈服すると見せかけて素早く反撃

——ロバート・ルケティックの『キューティ・ブロンド』における「馬鹿な金髪美人」という戦略

藤 田 秀 樹

はじめに

欧米、特に英語圏には、「馬鹿な金髪美人 (dumb blonde)」と呼ばれる、金髪女性に対する固定的なイメージ、具体的には、「金髪女性は魅惑的な容姿をしているが、頭が悪い」というステレオタイプが存在する。このようなステレオタイプが生じた要因については諸説ある。例えばある説は、金髪が未成熟な印象を与えることに起因する、としている。人は大人になってからよりも子供の頃に薄い色の髪や肌をしているものであり、ゆえに、金髪の人々は、それ以外の髪の色の人々と比べて成熟していない、つまりは無知で無防備で無能であるかのように扱われ、このようなイメージが女性にあてはめられると、「馬鹿な金髪美人」という観念が生み出されるというのである (Bates)。このステレオタイプにはハリウッド映画が深く関わっているとする説もある。1930年代のジーン・ハーロウをはじめとした「金髪セクシー美女 (blonde bombshell)」,そして1950年代のマリリン・モンローやジェーン・マンズフィールドといった女優たちと彼女らが演じた女性像が、金髪を性的魅惑と知性の欠如に結びつける役割を果たすことになる (Burton 23-25)。セクシーで簡単にセックスに応じる間の抜けた金髪女性を笑いの種にしたダム・ブロンド・ジョークの数々は、このステレオタイプがいかに社会に浸透しているかを物語るものであろう。

2001年に封切られたアメリカ映画『キューティ・ブロンド』(Legally Blonde)は、ダム・ブロンドという語句をもじったような英語の原題からも窺えるように、「馬鹿な金髪美人」というステレオタイプが物語の重要な構成要素になっている作品である。実際この映画のヒロインは、大学での自らの専攻でもあるファッション、さらには美容、パーティ、そして男性との恋愛が最大の関心事であり、過剰なまでに陽気でいささか浮ついた印象すら与える若い金髪女性という、言わば「馬鹿な金髪美人」を髣髴とさせるような人物として物語に登場する。物語の序盤で彼女は、ステレオタイプそのものの女性だという理由で、名家の御曹司で上院議員を目指す恋人に振られてしまう。諦めきれない彼女は、一念発起しての詰め込み受験勉強の末、その元恋人を追って難関のハーヴァード大学法科大学院への入学を果たす。物語はその大部分がこのロー・スクールを舞台に展開し、最後に、優秀な成績を取めたヒロインが総代を務める卒業式の場面とともに閉じていく。映画の原題が示唆するように、エリートたちが集まる

アメリカでも屈指の法曹の殿堂と、その偉容に満ちた空間をトリックスターのごとく攪乱する「馬鹿な金髪美人」という、不調和で意外性のある取り合わせに、この作品の大きな興味があると見えよう。そして、あからさまに劣位に置かれていたヒロインが、逆境をはねのけて名門法律事務所に職を得て学窓を巣立っていくという結末ゆえに、この映画を、『ロッキー』(Rocky, 1976), 『ベスト・キッド』(The Karate Kid, 1987), 『エリン・プロコヴィッチ』(Erin Brockovich, 2000) などと同様に、^{アンダードッグ}勝ち目のない者の逆転勝利の物語の系譜に連ねることもできそう。

このようにヒロインは、自らの金髪ゆえにスティグマのように負わされてきたイメージを覆す活躍を見せるのだが、一方で興味深いのは、彼女が地味で生真面目で禁欲的ながら勉型秀才に変身するのではなく、一貫してピンクをはじめとした人目を引く彩りの華やかなファッションに身を包み、美顔やマニキュアなどの様々な美容術を駆使して自らの容姿を磨き上げることを怠らず、基本的に過剰なまでに陽気で楽天的であるという、言わば「馬鹿な金髪美人」的な相貌を保ち続けることだ。つまり彼女は、「馬鹿な金髪美人」であり続けながら、同時に有能な新進弁護士となっていくのである。物語の大詰めに興味深いエピソードが配置されている。彼女はインターンシップで関わったある殺人事件をめぐる裁判において被告人の弁護を担当することになるのだが、最初はしどろもどろだったにもかかわらず、やがて美容に関する豊富な知識を駆使して検察側証人の証言の矛盾を暴き出し、実はその証人こそが犯人であることを明らかにする。このエピソードはこの映画の大団円とも言えるものだが、言わば彼女は、法の論理の世界に美容やファッションという異質な論理を持ち込むことで劣勢をひっくり返すのである。

「馬鹿な金髪美人」は、男性にとってこの上なく好都合な女性像であろう。まず彼女たちは、美貌という、男性が女性に望むもののひとつを備えている。男性が女性の容姿に価値を付与することからは、見る主体としての男性と見られる客体、モノとしての女性という、眼差しをめぐる男女の非対称な関係性が垣間見える¹⁾。しかるに「馬鹿な金髪美人」は、見られ陳列され消費される客体、モノであることなどには全く無頓着であるかのように、その美貌を誇示しさらに磨き上げることに励む。その上彼女たちは「馬鹿」、つまり無分別で無知で無防備であり、男性にとっては極めて御しやすい操りやすい存在である。「馬鹿な金髪美人」というステレオタイプは、女性に対する男性の願望を見事なまでに映し出すものと言えよう。

『キューティ・ブロンド』のヒロインも、物語の序盤まではまさに「馬鹿な金髪美人」そのもののような「能天気」で「軽い」女性に見える。プリンス・チャーミングとも言える男性に見初められ、その男性からのプロポーズを待望し、あっさりと捨てられても諦めきれずに追いつがるという、男性とのロマンティック・ラブにおいてお決まりとも言えるような女性の役割を演ずる。しかし物語の中盤頃から様相が変わってくる。彼女はロー・スクールで周囲からどんなに冷笑を浴びせられようとも、「馬鹿な金髪美人」的なファッションや立居振舞いを変え

ようとはしない。それらはあたかも、彼女のひとつの自己表現であるかのようだ。さらには、ロー・スクール進学のも動機であった元恋人も、彼女の関心の埒外になっていく。その一方で、ケンブリッジで暮らすようになってから知り合った美容院に勤める金髪の女性をはじめとして、何人かの女性たちとの女性同士の絆を深めていく。

『キューティ・ブロンド』は女性の新しい在り方を、あえて言うなら「ポストフェミニズム」時代の女性のひとつの在り方を提起したものであるまいか。以上のようなことを念頭に置きつつ、この映画テキストを読み解いていくことにする。

1. 上院議員になるなら、結婚相手は「マリリン」じゃなくて「ジャッキー」

『キューティ・ブロンド』の冒頭のクレジット・シークエンスにおいてまず画面に現れるのは、金色の長いものがゆらゆらと揺れるように動いている映像だが、カメラのレンズの焦点が合っていないために全体がぼやけている。まもなく映像は鮮明なものになり、それが波打つようにウェーブした豊かな金髪であることが分かる。このように、映画のタイトルの一部を成し、また物語の重要なモチーフともなるものが早くも提示される。その金髪は入念にブラッシングされているが、ブラシを持つ人物はまだ映されていない。このショットとクロスカットする形で、表に「エル」という名前が書かれたカードを籠に入れて自転車漕ぐ若い女性の姿が映し出される。この女性の自転車は、三々五々集まって楽しげに笑いさざめく大勢の若い男女の間を走り抜けていく。どうやらここが大学の構内であるらしいことが分かる。そして自転車は、「女子学生クラブ デルタ・ヌー」というプレートが入口に掲げられた敷地の中に入って行く。一方金髪の女性は、脚をシェービングしたり手の爪にマニキュアを塗ったりと、自分の容姿を磨き上げることに余念がない。彼女がいる部屋の中の様子も映し出される。机の上には、「CULA デルタ・ヌー 会長 エル・ウッズ」と書かれた置物がある。かようにここで、エル・ウッズという、この映画のヒロインの名前が提示される。CULAは大学名であろう。この校名から、ロサンゼルスにある大学であることが窺える。部屋の内部は、全体的に赤やピンクといった赤色系統の色彩が支配的である。さらにこのシークエンスでは、画面に現れる制作スタッフや出演俳優たちの名前を表示するクレジットまでもがピンク色なのだ。加えて、赤色系統はエルの「トレードマークの色 (signature color)」であり、彼女は多くの場面、とりわけ重要な場面において、あたかもそれが自らのアイデンティティであるかのように、この色の服を身に纏う。まるで赤やピンクという色彩が、この映画の主調であるかのようだ。赤色系統、特にピンクは、女性らしさを象徴する色とされる (Vries 367)。このことと関連して、ヒロインのエル (Elle) という名が、フランス語で「彼女」を意味する代名詞であることは興味深い。かようにこのヒロインの人物造型においては、女性性が強く前景化される。

自転車でやって来た女性が持参した、表に「エル」と書かれたカードは、デルタ・ヌーのク

ラブハウス内で回覧され、女子学生たちが次々とそこに署名していく。女子学生クラブのクラブハウスは若い女性の園であり、エルの部屋——これもデルタ・ヌーのクラブハウスの中にある——と同様に、赤やピンクの霞がかかっているような華やかさに包まれている。クラブハウス内を回ったカードは、最後にエルの二人の親友の手に渡り、彼女たちはそれをドアの下からエルの部屋の中に滑り込ませる。このカードを手にしたときに、ようやくエルの顔を含めた上半身が映し出される。入念に手入れされた豊かな金髪。その金髪に付けられた大きな花の形の髪飾り。ハート形のネックレス。紅色のドレス。そして美顔術で磨き上げられた艶やかな肌。まるでその姿は、人形のようにも見える。カードには、「今夜は頑張って。エルとワーナーはいつまでも」と書かれている。ワーナーはエルの恋人で、五代に渡って上院議員を輩出してきた名家の御曹司である。エルはその日の夜に彼と会う予定であり、彼から重大な話があるのではないかと期待している。このようにエルは、磨き上げられた容姿を「資源」として、理想的な条件を備えた男性から寵愛され、その男性の妻となって庇護されることを夢見ているのである。「見られる客体」であることにも、また「ワーナー・ハンティントン三世夫人」という、ある男性の妻というステータスのみを社会的アイデンティティとすることにも、何の疑問も違和感も持たない。先にエルを人形になぞらえたが、“doll”という英単語には「魅惑的な容姿をしているが、知性が欠如した軽薄な女性」という意味もある。実際エルは、このような印象を与える女性として物語に登場する。

クレジット・シークエンスのあとに、エルに対して「馬鹿な金髪美人」という語句が実際に使われるシーンがある。エルは二人の親友と一緒に、ワーナーとのデートに着ていく服を求めたブティックを訪れる。その店の女性店員は、エルを見て同僚に次のようにつぶやく。「パパのクレジット・カードを持った馬鹿な金髪美人は最高のカモよ (There's nothing I love more than a dumb blonde with daddy's plastic.)」。そしてその店員は、値札を取り外した服をエルに高く売りつけようとする。しかしファッションを知悉しているエルは、すぐにその服が店員の言うような上質な品ではないことを見抜く。ファッションの知識を駆使して虚偽を見破るという彼女の能力は、この物語の大団円においても発揮されることになる。

その日の夜、あるレストランがエルとワーナーのデートの場となる。エルは、この夜ワーナーからのプロポーズを期待している。やがてワーナーは、ほくたちの将来について話し合いたい、と切り出す。いよいよ待ち望んだことが実現するのを確信して、エルは高揚した表情を浮かべる。しかし、思わせぶりな勿体を付けたあと、ワーナーの口から飛び出したのは、「ほくたちは別れたほうがいい (I think we should break up.)」という言葉である。てっきりプロポーズの言葉が発せられると思いついていたエルは、ほぼ同時に「お受けします (I do)」と言ってしまう。思いもよらない展開に動転しながら、エルは理由を問い詰める。するとワーナーは、30歳になるまでには上院議員になりたい、と前置きしてから、「もし上院議員になるのなら、マ

リリンじゃなくてジャッキーのような女性と結婚しなきゃならない (If I'm going to be a senator, I need to marry a Jackie, not a Marilyn.)」と言い放つ。マリリンとはマリリン・モンローを、ジャッキーは第35代アメリカ大統領ジョン・F・ケネディの妻、ジャクリーン・ケネディを指している。つまり将来の上院議員の妻としてふさわしいのは、「マリリン」のような「馬鹿な金髪美人」タイプではなく、「ジャッキー」のような知的で品位ある女性ということなのだ。ワーナーは、「ぼくには真面目につきあう人が必要なんだ (I need someone serious.)」とも言う。彼にとってエルのような「マリリン」タイプの女性は、「ちんたら遊ぶ」相手にすぎないのである。ショックのあまり、エルはあたりをはばかりぬ大声で泣き出す。「馬鹿な金髪美人」ぶりの上塗りとも言うべき有様である。かようにエルは、名家の御曹司の妻にはふさわしくない女性としてあっさり捨てられる。

かくして、金髪女性に対する不条理な固定観念ゆえにヒロインの身に降りかかった理不尽な事態をきっかけに、物語は大きく動き出す。エルは失意に沈むが、美容院である雑誌の記事を目にしてから俄然生氣を取り戻す。その記事は、イエール大学法科大学院の学生であるワーナーの兄の婚約を報じたもので、添えられた写真には、この兄と婚約者だという不器量な女性が並んで写っている。そして、この女性も同じロー・スクールの学生であることを知ると、エルは興奮気味にこう叫ぶ。「これこそワーナーが結婚したがるタイプの女性よ!」。隣にいた老婦人がその写真を見て「ものすごく不細工な女性ということ? (Practically deformed?)」と言うのが可笑しいが、エルは、ワーナーが進学するハーヴァード大学ロー・スクールに自分も進むことができれば、彼に見直され結婚することができる、と考えたのである。あまりにも短絡的な発想だが、このあたりから彼女の思考や行動は、単なる短慮や無分別ではなく、楽天的なまでに前向きで愚直な潔さといった趣を呈し始める。エルは猛勉強を始めるが、一方で容姿を磨き上げることも怠らない。その結果、ロー・スクール入学に必要な統一適性試験で何とか及第点を取り、大学での専攻や課外活動、さらには本人がビキニ姿で登場するという型破りなビデオ・エッセイが肯定的に評価されて、エルはアメリカでも屈指のこの名門ロー・スクールに合格する。映画の中盤以降、物語の舞台はロサンジェルスからマサチューセッツ州ケンブリッジに移る。

2. ロー・スクールの「道化」

エルのハーヴァード大学ロー・スクールへの入学が決まる前に、入学者選抜に携わる学内のアドミッションズ・オフィサーたちが集まり、エルについて審議する場面が挿入される。件のビデオ・エッセイの映像が流され、続いて、それを啞然とした表情で見つめる担当者たちが映し出される。審議の結果、多様な学生を入学させるというポリシーに則ってエルの合格が決まるのだが、このときの彼らの表情は、このロー・スクールにとってエルという存在が、多様性などという枠組をはみ出すほど「規格外」であることを物語るものであろう。

実際、エルは学内に初めて足を踏み入れたときから、「珍奇」な存在として他の学生たちの注目を浴びることになる。彼女は引越したトラックを従えて、これから暮らすことになる学寮の前に派手なスポーツカーで乗り付ける。降りてきた彼女の出で立ちは、赤い革製のツーピース——上着は胸元が大きく開いている——に赤いレンズの眼鏡というものであり、たちまち彼女の周りに人だかりができる。学生たちは好奇の、またあきれたような眼差しをエルに向ける。学寮の窓にも学生たちが鈴生りになり、「マリブ（ロサンジェルス西方にあるサーファーのメッカでもある海浜地）のバービー人形みたいなおめかし女を見ろよ！（Check out Malibu Barbie!）」という声が飛ぶ。しかしエルは全く動じる様子もなく、颯爽と学寮の中に入って行く。

エルの「異分子」ぶりは、新入生のためのオリエンテーションでも際立つ。ここでも彼女は、赤いベレー帽に赤いロングスカートという出で立ちだ。受付で書類などを受け取ったエルは、「親睦会などの社交イベントの予定表がないわ」と言っ、係の上級生をあきれさせる。少人数に分かれてのオリエンテーションとなり、ひとりひとりが自己紹介をする。ロシア文学で修士号、生化学で博士号を取り、ソマリアで寄生虫駆除の活動を行ったデヴィット・キドニーは、見るからに「おたく」的風貌の男子学生だ。女性学で博士号を取り、飲酒運転に反対するレズビアンのデモ行進を組織したエニッド・ウエクスラーは、「フェミナチ (feminazi)」と呼ばれる戦闘的フェミニストであろう。この女子学生は、その洒落っ気のない容姿と急進的なフェミニスト的言動によって、エルの特徴を際立たせる引き立て役 (foil) となっているようにも思える。IQ187を自称するアロン・ミッチェルは、世界的な理論物理学者の「スティーブン・ホーキングの『ホーキング、宇宙を語る』は、ぼくが小学4年生のときに書いたレポートを剽窃したものだ」という誇大妄想を披歴する。この面々は、いかにもハーヴァードにいそうなタイプということなのであろう。そしてエルの番になる。彼女は、去年の学園祭の女王だったことや、二週間前に女優のキャメロン・ディアズと会ったときに、彼女を説得して最悪のアンゴラ織りセーターを買うのを思いとどまらせたことなどを滔々とまくし立てる。他の学生たちが啞然とした表情で彼女を見つめる様子が映し出される。入学者選抜の場面と同様に、彼らの表情は、エルがこのロー・スクールでどのような存在であるかを明示するものだ。

エルが出席する最初の授業の場面も見ていくことにする。ロー・スクールでの最初の授業ということで、このときの彼女の装いには、並々ならぬ熱情と創意が込められている。特に印象的なのは、鮮やかな青色のジャケットとネクタイである。*Webster's Third New International Dictionary of the English Language*によれば、“blue”という語には「(女性が)学問のある (learned)、知的な (intellectual)」という意味がある。この色を前面に押し出した装いは、ロー・スクールで学ぶインテリ女性の演出であろう。しかし同時に、ジャケットの下のシャツはピンクであり、自分の「トレードマークの色」を配置することにも手抜かりがない。最初の授業を担当するのは女性のストロムウェル教授であり、黒板には「法は情念とは無縁の理性である (The law is

reason free from passion.)」というアリストテレスの言葉が書き込まれている。他の学生たちは各々ノート型パソコンを持ち込んでいるが、エルが用意しているのは、赤いメモ帳とピンクの房飾りのついたペンだけである。授業が始まってすぐに、事前に与えられた課題をやっていなかったため、エルは退室を言い渡される。このように、早くも最初の授業で、彼女は怠惰で無能な学生の烙印を押されることになる。

このロー・スクールという空間において、エルは「道化」のような佇まいを漂わせる。まず、異彩を放ち周囲の当惑と失笑を招く彼女の「異貌」に注目したい。道化を特徴づけるもののひとつとして、「異形」性を、つまり「正常な市民の規準に照らして異形の風采」を挙げることができる（高橋 10）。それは異形の肉体、及びグロテスクで奇怪な衣装に反映される（ウィルフォード 42-45）。そしてこの異形性は、混沌を暗示するものである（ウィルフォード 45）。入念な手入れを誇示するような豊かな金髪と、赤色系統を基調とした過剰なまでに華やかな衣装という、権威ある法曹の殿堂とはおよそ不調和なエルの容姿も、この殿堂の「正常な構成員の規準」からはなはだしく逸脱した「異形の風采」なのではあるまいか。

物語の少しあとの方で、いつの間にかワーナーの婚約者になっている同じロー・スクールの学生のヴィヴィアン・ケンジントン——言わば彼女はエルのライバルである——の悪意ある嘘によって、学生同士の普通の親睦会を仮装パーティだと伝えられたエルが、バニーガールの恰好で会場に姿を見せる場面がある。当然エルは失笑とあきれ顔で迎えられることになるのだが、だまされた結果とは言い、ここにも道化的な相貌が垣間見えるのではなからうか。ある場所に、そこには全くふさわしくない、また普通なら予想もできないような姿で闖入し人々を驚かせるという振舞いは、演劇的とも言える。山口昌男によれば、道化は「平凡な日常生活の中に、見馴れぬ事物の姿を立ち顕わさせたり、何でもない人、事物の中に見馴れぬ相貌を重ねていくという技術」を備えている(48)。それは「異化」と呼ばれるものに近似する技術と言える。エルも、突飛で奇矯な姿で闖入することにより、この親睦会という社交の場を異様で非日常的、祝祭的なものに変えてしまうのである。

このようにエルは、節度に対して過剰を、勤勉さに対して遊戯性を、秩序に対して混沌を、規範に対して逸脱を体現するような存在である。さらに道化と言えば、そもそもエルは「馬鹿な金髪美人」として「愚者」のイメージを帯びた存在でもある。実際ここまで見てきたように、彼女は愚者にふさわしい様々な「愚行」を演じている。しかし一方でそれらの愚行は、ロー・スクールの「知」の秩序や規範を挑発し攪乱するものにもなっている。彼女の愚行がそのような機能を果たすとき、愚者は道化へと転化するであろう。道化は、「機知と悪態と笑いによって『賢』と『愚』の価値規準をくつがえし、共同体の慣習と秩序を攪乱し活性化」という役割を担う（高橋 10）。エルもこのような側面を持っているのではあるまいか。エルの道化性については、あとで再び触れることにする。

3. ^{ベンド・アンド・スナップ} 屈服すると見せかけて素早く反撃！

道化はまた、「心身上の異形性や偏奇性のゆえに」、秩序の周縁部に位置付けられる「マージナルな〈異人〉そのもの」でもある（赤坂 148）。最初の授業において退室させられるのを嚆矢として、入学当初は、エルもまさにその「異形性」や「偏奇性」ゆえにロー・スクールというコミュニティから半ば排斥された状態に置かれる。エル排斥の急先鋒となるのが、ワーナーをめぐるライバルとなるヴィヴィアンである。彼女のそのような役割は、エルが追い出されることになる最初の授業のシーンで早速発揮される。エルが課題をやっていないことを知ったストロムウェル教授は、ヴィヴィアンに「ウッズさんが授業の準備をしていないことを容認できると思いますか？（Do you think it's acceptable that Ms. Woods is not prepared?）」と尋ね、ヴィヴィアンはきっぱりと「いいません」と答える。さらにストロムウェルが「私は彼女にこの授業から出て行くよう、そして準備をしているときだけ授業に戻ってくるよう、求めることにしたのですが、それを支持していただけますか？（Would you support my decision to ask her to leave class and to return only when she is prepared?）」と問うと、ヴィヴィアンは即座に「もちろんです（Absolutely.）」と言い切る。言わば彼女は、エルにこの学びの場からの退場を宣告する役割を担うのである。かように、ヴィヴィアンはヒロインのエルに対する敵役として物語に導入される。

ヴィヴィアンの容姿に注目したい。エルとは対照的に、彼女はブルーネットであり、淡い青色のセーターとシャツを着ている。彼女はこれ以降も、繰り返し青色の衣服を身に纏っている。つまり彼女は、ワーナーにとって上院議員の妻にふさわしい「ジャッキーのような女性」——ジャクリーン・ケネディもブルーネットだった——なのである。彼女の装いの淡く落ち着いた趣の青色は、彼女に知的な女性のイメージを付与するものとなっている。この色合いと比べると、エルのジャケットとネクタイの派手で濃厚な青色は、まるで鍍金を施したもののようにも、つまりこの段階ではまだエルが表面だけを飾って中身が伴わない「インテリ女性」であることを暗示するもののようにも見えてくる。かようにこの二人の女性は、容姿を通して対立的な関係性が可視化される。

ヴィヴィアンはエルに対して敵意をむき出しにする。エルはヴィヴィアンとワーナーもメンバーになっている勉強会に加わりたいという意向を示すが、ヴィヴィアンが強硬に反対したため、入会を阻まれる。さらに先述のように、ヴィヴィアンの奸計により、エルは親睦会に場違いな恰好で赴くことになる。このとき、エルはワーナーから辛辣なことを言われる。キャラハン教授が成績優秀者には自分の法律事務所でインターンとして研修を受けさせると言っていたことが話題になり、エルはインターンに選ばれることへの意欲を示す。するとワーナーは言う。「エル、冗談だろう。君がインターンに選ばれるような成績を取れるはずがない。君はそんなに頭が良くないよ（Elle, come on. You'll never get the grades to qualify for one of those [internship]

spots. You're not smart enough.)」。これらの言葉は、ワーナーがエルをどんなふうに見ているかを端的に表すものであろう。エルはかつての恋人の侮蔑的な言辭に大いに発憤し、勉強に本腰を入れるようになる。一方でエルらしく、ファッションと美容への気配りも怠ることはない。つまり、真剣に法のエキスパートを目指しつつも同時に「金髪美人」でもあるという、まさにこの映画の原題のような存在になっていく。

このあたりから、ワーナーに対するエルの熱は次第に冷めていく。その一方で、まるでヘテロセクシャル・ロマンスに見切りをつけたかのように、彼女は何人かの女性たちと女性同士の絆を深めていく。最初に親密になるのは、たまたま訪れた美容院で出会ったポーレットというマニキュア師である。ワーナーに婚約者がいたことを知って大きなショックを受けたエルは、爪の手入れをしてもらうことで乱れた心を鎮めようとある美容院に飛び込む。そのときマニキュアを担当したのが、エルと同じ金髪女性のポーレットである。彼女は自らを、「中年で、ハイスクール中退で、体に伸展線が付いていて、おまけにデカ尻 (a middle-aged high-school dropout, who's got stretch marks and a fat ass)」と形容する。彼女もまた、知性が欠如し軽佻浮薄という、金髪女性のステレオタイプを地で行くような雰囲気漂わせる女性である。金髪であることに加えて、エルとポーレットにはいくつかの共通点がある。エルと同様に、ポーレットも恋人の男性に捨てられるという悲痛な体験をしたばかりである。彼女は長年その男性と一緒に暮らしてきたが、ある日突然、新しい恋人ができたと言われ、追い出されてしまったのだ。さらに、ペットの犬を大事にしているところもエルとよく似ている。かように、いくつも点で似た者同士であるこの二人は、急速に親密さの度合いを深めていく。

イヴ・ゴゾフスキー・セジウィックによれば、「家父長制の構造に関する近年の最も有用な文献の多くは、『強制的異性愛』が男性中心の親族システムに組み込まれていることを示唆している」(3)。言わば、強制的異性愛やロマンスや結婚は、女性を家父長制に隷属させるものなのである。とすれば、エルが男性とのロマンスよりも女性同士の絆に傾斜していくことは、図らずも男性中心の秩序に対するひとつのレジスタンスにもなっているのではあるまいか。

エルとポーレットが力を合わせ、ポーレットの元恋人の所に押しかけてペットの愛犬を取り戻す場面は興味深い。当初、元恋人はポーレットを見下したような態度を取り、ポーレットも言いたいことも言えず、おずおずとした様子を見せる。するとエルが、ポーレットには犬を受け取る権利があるということを法律の専門用語を駆使してまくしたて、彼を面食らわせる。そしてエルに鼓舞されて、ポーレットも次のような言葉を元恋人に浴びせる。「犬は連れていくわよ。このぼんくら野郎！ (I'm taking the dog, dumbass!)」。このように、強い絆で結ばれた女性たちが、力を合わせて男の横暴に反撃し、勝利を勝ち取るのである。このようなパターンは、これ以降の物語の展開において基調を成すものとなる。

男の横暴や身勝手さの糾弾という点で、この直後のシークエンスも興味深い。キャラハン教

授の授業の場面であり、精子の提供者が生まれた子供にストーカー行為をして訴えられたという事例が取り上げられている。ワーナーは、被告の男性の精子がなければ当の子供は存在していないのだから、被告には子供に会う権利がある、と主張する。それに対してエルは、被告は人生におけるあらゆる射精に関する記録を残しているのだろうか、という疑問を投げかける。そして、被告がこれまで出会った全ての一回限りの情事の相手と接触して、その行為の結果、子供が生まれたかどうか確かめているのでない限り、彼には当の子供に関して親としての権利を要求することはできない、と反論する。つまりエルは、男性は自分の都合のいいときだけ精子に関する権利を主張することはできない、と述べているのだ。キャラハン教授はエルに、「君の勝訴だな」と言う。このようにエルは、ワーナーの主張に潜む「男の論理」を論破するのである。

男性優位の社会において、男性に対抗するためのエル独自の戦略とでも言うべきものが、身体を使った一種のパフォーマンスという形で表現される場面がある。ポーレットは勤め先の美容院をたびたび仕事で訪れる宅配配達員の男性に心を惹かれているが、その男性が現れても普通の挨拶の言葉しか交わすことができない。それをもどかしく思ったエルは、彼女に男性の気を引くためのある作戦を教える。それは「屈んでぱっと上体を起こす (bend and snap)」と呼ばれる、落としたものでも拾い上げようとするかのように身を屈めてから急に直立するという仕草である。エルはそれをポーレットの美容院で実演してみせる。すると、美容院の女性客たちがそれに強い関心を示す。この仕草には、女性たちの心に響くものがあるのだろう。人種や年齢の壁を越えて女性たちが一体となり、「バンド・アンド・スナップ」をやり始める。その様子はまるで群舞のようである。ハーバート・ロスの『マグノリアの花たち』(Steel Magnolias, 1989)と同様に、『キューティ・ブロンド』においても、美容院は女性たちにとってのアジールとしての役割を担っているように思われる。この女性たちの空間において、「バンド・アンド・スナップ」をきっかけとしてにわかには現出する日常の社会的分節を一時的に消失させる一体感と高揚のひとときは、女性たちの祝祭という様相を呈する。

ここで、「バンド・アンド・スナップ」という仕草がどのような戦略を表現するものなのかを考えてみることにする。*The New Oxford American Dictionary*によれば、“bend”という語には「身を屈める」に加えて「屈服することを強いられる (be forced to submit)」という意味がある。そして“snap”には、「素早く動く」とともに「いきなり鋭いぼきりという音とともに完全に壊す／折る (cause to break suddenly and completely, typically with a sharp cracking sound)」,及び「(動物が)いきなりがぶりと音を立てて噛みつく (make a sudden audible bite)」の意もある。「バンド・アンド・スナップ」は、身を屈めて屈服するようなポーズを取りながら、次の瞬間に素早く痛撃する、ということを表示しているのではあるまいか。実際、ポーレットはそれを実践してしまう。彼女は件の好意を寄せる宅急便配達員の前でこの仕草をやってみる。しかし「スナッ

プ」の動作で彼の顔面に頭突きを食らわせる羽目になり、彼の鼻を折ってしまう。観客の笑いを誘うコミカルな場面だが、それは「ベンド・アンド・スナップ」の本意を明示するものでもある。言わば、男性との向き合い方をめぐる女性のひとつの意思表示である。つまり、屈服するような風を見せても、たちまち反撃に転ずる用意がある、ということの身体を使った示威表現だ。この表現を目の当たりにしたときの女性たちの熱狂的な反応は、彼女たちがそこに込められた意味に直ちに感応したことを暗示しているのではない。

そして「ベンド・アンド・スナップ」はまた、エルが体现する女性性の暗喩でもあるように思われる。エルは真剣に勉学に打ち込むようになるが、一方で、まるでそれが自分のアイデンティティであると言わんばかりに、ファッションや美容への気配りも忘れない。言わば「馬鹿な金髪美人」としての容姿や振舞いも保持するのである。既述のように、「馬鹿な金髪美人」は、男性にとって操りやすく御しやすい極めて好都合な女性類型である。自らの存在理由であるかのごとく容姿を磨き上げることにのみ精魂を傾けるように見えるこのタイプの女性たちは、女性を見られ陳列され消費される客体、モノと格付けようとする家父長制的企みの好餌であろう。ステファニー・ゲンズによれば、「一見生得的なものである女性であることと美しくなりたいという願望との結びつきは、女性をその容姿と絡めて識別し、そうすることで見られ陳列され買われる客体という地位に置こうとする家父長制の言説によって長い間支えられてきた」のであり、一方で「容姿の美しさというものはまた、それが持つ女性を操り拘束し身体を毀損する側面を暴き出す大勢のフェミニストの著述家たちによって批判されてきた」(123)。フェミニストにとっては、「馬鹿な金髪美人」は、家父長制秩序に加担してしまう、言わば男性中心の秩序に屈服する存在であろう。

一方エルは、ロー・スクールの授業でクラスメートを論破するほど「賢く」なり、また容姿や肉体で魅了することで将来性のある男性の妻になるという、以前のような「女性としての幸せ」には関心を持たなくなっているにもかかわらず、従来のように自分の容姿を磨き上げ続ける。ファッションと美容で磨き上げられる彼女の容姿は、男性によって見られ欲望され価値を定められる性的客体ではなく、むしろ主体的な自己表現や存在証明であるようだ。同時にそれは、男性が女性を操り支配しようとすることに対する素早い反撃のための武器にもなるものではないだろうか。そのことを次のセクションで見えていくことにする。

4. 法廷を席捲するファッションと美容の論理

勉学に打ち込んだ甲斐あって、エルはワーナーやヴィヴィアンなどとともに、キャラハン教授のもとでのインターンシップのメンバーに選ばれる——このインターンシップに志願するためにエルが提出する履歴書が、ピンク色で香水つきというのが彼女らしい。キャラハンが弁護人を務める実際の裁判において研修は行われる。被告のブルック・ウィンダムは射殺死体で発

見された富豪の妻で、夫の殺害容疑がかけられている。彼女自身もフィットネスで一大帝国を築き上げている。エルはブルックがCULAのデルタ・ヌーの先輩であることに気づく。そして彼女は、キャラハンや他のインターンたちに次のように語る。「ブルックが殺人を犯して凶器を隠すなどということをしたとは思えません。運動をすると、エンドルフィンが分泌されます。エンドルフィン人は人を楽しい気分させます。楽しい気分にある人たちは、自分の夫を撃ったりはしません」。キャラハンたちが法の論理に基づいて議論を行っている最中に、エルは「フィットネスの論理」に基づいて独自の解釈を展開させるのである。

実際、ブルックは無罪を主張する。自分が行ったときには夫はもう死んでいた、と言う。ブルックも金髪で、フィットネスによって健康的で美しい体型を維持している。彼女にはアリバイがあるらしいのだが、なぜかそれについて話すことを拒む。弁護人であるにもかかわらず、キャラハンには彼女に対してあまり良い心証を持っていないようである。その容姿ゆえに、彼女の言うことは信用できないと考えているようにも見える。一方ブルックも、キャラハンに対して不信感を抱いている。彼女はエルを見て、かつてロサンジェルスフィットネス教室で指導したことがあるのを思い出す。エルもブルックの大ファンであり、二人はすぐに親密になる。ここでもうひとつの女性同士の絆が醸成されていく。

そしてブルックは、面会に来たエルに、それまで語ることを拒んできたアリバイについて打ち明ける。夫が殺害された日に、彼女は脂肪吸引をしていたのである。そのことが公になれば、フィットネスのカリスマとしての権威と名声は地に落ち身の破滅となるため、明かすことを拒んできたのだ。エルはブルックを思い遣り、秘密を守ることを約束する。事実エルは、キャラハンからブルックのアリバイについて問い質されても、「女同士の連帯の絆を破ることはできません (I can't break the bonds of sisterhood.)」と言って教えることを拒む。するとキャラハンは、「女同士の連帯が何だ! (Screw sisterhood!)」と声を荒らげる。さらにキャラハンが中座すると、ワーナーがエルに次のように言う。「気は確かかい? 教授にアリバイを教えてやれよ。そうしないと敗訴だ。君がアリバイを教えれば、教授は君を夏期のアソシエイトとして雇ってくれる。ブルックのことなんてどうでもいいだろう (Who cares about Brooke?) ? 自分のことだけ考えろよ (Think about yourself.)」。このときカメラは、ワーナーの被告を弁護する側の人間にあるまじきこれらの言葉に、ヴィヴィアンが思わず眉をひそめるのを映し出す。キャラハンやワーナーにとっては、女性同士の絆や連帯はおおよそ理解も想像も及ばないものなのである。

その日の夜、学寮のエル部屋をヴィヴィアンが訪れる。彼女はエルに次のように言う。「あなたがキャラハンにアリバイを教えなかったことは未だに信じられない。そして、あのときのあなたはとても素敵だと思った (I thought that was very classy of you.)」。このようにヴィヴィアンは、エルの振舞いを称賛する。また、キャラハンが自分にばかりコーヒーを入れるよう言いつけることを愚痴る。ちなみにこのようなキャラハンの態度は、のちの彼のエルに対する振舞

いの伏線になっている。さらにヴィヴィアンは、ワーナーが最初にこのロー・スクールに出願したときには合格せずに待機者リストに入れられたため、彼の父親の影響力を借りて何とか潜り込むことができたことを明かす。このようなことを話題にしながら、二人は楽しげに語り合う。二人の間にあったわだかまりは氷解している。女性同士の絆を守ろうとするエルの振舞いが、もうひとつの女性同士の絆を生み出したのである。

ブルックの裁判が始まる。検察側証人として出廷したエンリケという名のウィンダム家のブルック系の若い男性は、ブルックと性的な関係を持った、と証言する。若い愛人の存在が高齢の夫をブルックが殺害した動機であるというのが検察側の思い描く事件の構図のようだが、ブルックはエンリケと関係を持ったことをきっぱりと否定する。一旦休廷となったのち、裁判所の廊下で偶然エンリケと接触することになったエルは、彼がデザイナー・ブランドに詳しいことを知って——彼はエルの靴がプラダであることを言い当てる——この男はゲイに違いないと確信する。そして早速そのことをキャラハンたちに伝えるが、キャラハンは「君の見事な法理論には感謝申し上げるが、私はこれから殺人事件の審理に対処しなければならないんだ」と皮肉たっぷりにエルの見解を一蹴する。しかし、ハーヴァードのロー・スクール出身でキャラハンの法律事務所の弁護士であり、エルの数少ない理解者のひとりであるエメットが、直後の審理で、巧みな誘導尋問によってエンリケが実際にゲイであることを明らかにする。かくして、ブルックに関するエンリケの証言は信憑性を失う。キャラハンは「見事な法理論 (masterful legal theory)」などと皮肉を込めて腐したが、「ゲイの男はデザイナー・ブランドに詳しい。ヘテロの男は詳しくない」という、エルのファッションに通暁した者ならではの洞察が、弁護側に大きなアドヴァンテージをもたらすのである。

しかしこの殊勲のあと、エルは逆境に直面する。その日の審理のあと、エルはキャラハンの部屋に呼ばれる。キャラハンはその日のエルの功績を称える一方で、自分の法律事務所を取り立てることをちらつかせながら、エルの体に触り言い寄り始める。この様子を、ちょうどそのときキャラハンの部屋に入りかけたヴィヴィアンに目撃されてしまう。指導教授の思いもよらない態度にエルが愕然とすると、キャラハンは平然と、「私は自分の好みをちゃんと心得ている男だ (I'm a man who knows what he wants.)」と言い放つ。するとエルは、「私は自分の指導教授が情けない最低野郎だということに気づいた法学生です (I'm a law student who just realized her professor is a pathetic asshole.)」と言い返す。彼女のこの言い回しは、相手の言い回しをなぞった当意即妙の切り返し (repartee) であろう。これに対してキャラハンは、「とても残念だな。君は法律家になりたがっている法学生だと思っていたのだが (Too bad. I thought you were a law student who wanted to be a lawyer.)」という言葉を浴びせる。これは、君はもう法律家にはなれない、という通告であろう。のちにエルがエメットに語るように、キャラハンが彼女をインターンシップのメンバーに選んだのは、彼女の容姿が気に入ったからなのだ (Callahan only

gave me that internship because he liked the way I looked.)。結局エルはキャラハンにとって、見られる性的欲望の客体にすぎなかったのである。

打ちのめされてキャラハンの部屋をあとにしたエルに、今度はヴィヴィアンが辛辣な言葉を浴びせる。「もう少しであなたにだまされるところだった (You almost had me fooled.)。陪審員たちとも寝てみればいいんじゃない。そうすれば勝訴よ (Maybe you should sleep with the jury, too. Then we can win the case.)」。ヴィヴィアンはエルがキャラハンに色仕掛けを試みようとしていたと思い込んだのである。エルが乗り込んだエレベーターの扉が閉まり、鏡状の扉の内側が彼女の姿を映し出す。キャラハンにあのように扱われるのも、ヴィヴィアンに誤解されるのも、全てこの容姿のせいなのか、という彼女の遣る方ない思いが表現されているようなショットである。

その直後にエメットに遭遇したエルは、キャラハンにされたことを打ち明け、もうロー・スクールをやめてロサンジェルスに戻る、と言う。さらに次のように続ける。「うんざりするようなスーツを着るのはもうたくさん。パンティストッキングをはくのも、もうたくさん。本当の自分じゃないものになろうとするのも、もうたくさん (No more trying to be something that I'm just not.)」。これらの言葉からは、「馬鹿な金髪美人」が法律家を目指すということがそもそも間違いだった、という無念さが窺える。するとエメットは、「本当の自分になろうとしてみてはどうだろう? (What if you're trying to be somebody you are?)」と言う。しかしエルは、「カリフォルニアに来ることがあったら電話して」という言葉を残して立ち去る。

場面はポーレットの美容院へと移る。店の前に停められたエルの車には、トランクが山と積まれている。エルとポーレットは抱き合いながら別れを惜しんでいる。エルは言う。

人は私の金髪と大きなおっぱいしか見ていない (All people see when they look at me is blonde hair and big boobs.)。誰も私のことを真面目に考えてくれない (No one's ever gonna take me seriously.)。ロー・スクールの人たちもそうだし、ワーナーもそう。私の両親ですら同じ。生まれて初めて、私がヴィクトリアズ・シークレット(アメリカのファッション・ブランド)のモデルになる以上のことを成し遂げると人に思ってもらえているような気がしていた (I just felt, like, for the first time, that someone expected me to do something more with my life than become a Victoria's Secret model.)。でも自分をごまかしていただけ (But I was just kidding myself.)。キャラハンは一度も私を法律家と見なしたことはなく、ただセックスの対象と見ていた (Callahan never saw me as a lawyer, just as a piece of ass.)。他のみんなと同じように。私が笑いのものだということが分かっただけ (Turns out I am a joke.)。

することここで、ひとりの客がエルに語りかける。「もしあなたが愚かでくだらない男に人

生を台無しにされて黙っているようなら、私の見込み違いだったということね (If you're going to let one stupid prick ruin your life, you're not the girl I thought you were.)」。その客はストロムウェル教授であり、我々はここで改めて彼女も金髪であることに気づかされる。もうひとつの女性同士の絆が、土壇場でエルを立ち直らせることになる。続く場面では、エメットとヴィヴィアンがブルックと面会している。エメットはキャラハンがエルに言い寄ったことを明かし、ヴィヴィアンは自分の思い違いを悔やむ。エメットは「我々に何か打つ手があるはずだ」と言う。

続いて画面に現れるのは、裁判所での審理の場面である。ブルックはこれまでとは違って、胸元が大きく開いたシックな黒いドレス、首には大きなペンダントという出で立ちで法廷に現れる。法廷という厳かな場で本来は神妙な面持ちでいるべき被告人が、あえて意志的に場違いな恰好をした「馬鹿な金髪美人」に変身したかのようだ。そして、その姿を見てあきれたような反応を示すキャラハンに対して、「あなたはクビよ。新しい代理人がいるの」と言い渡す。その「新しい代理人」が颯爽と登場する。鮮やかな赤い衣装に身を包んだエルである。彼女はインターンシップの間着ていた地味で禁欲的なスーツ——まさに彼女が言うところの「うんざりするようなスーツ (boring suits) である——を脱ぎ捨て、自分の「トレードマークの色」で身を固める。エメットが言うように、「本当の自分」になろうとしているように見える。監督者として法曹資格を持つ弁護士がついていれば法学生でも被告の弁護人を務めることができるという州の規定を利用して、エルはブルックの弁護を担当することになったのだ。監督者はエメットが務めることになる。

法廷に立ったエルは証人尋問を行う。証人は殺された富豪の娘であり、血まみれのブルックが父の死体を見下ろすように立っていた、と証言している。ちなみに、ブルックに不利な証言をするこの娘と彼女の母親、つまり富豪の元妻はどちらもブルーネットである。彼女たちとエル及びブルックとの対抗的な関係性が、かように髪色のコントラストによっても強く印象づけられる。エルは証人に、被害者が殺害されたときに何をしていたかを問い質すが、初めて法廷に立ったためか、ややしどろもどろで頼りなげな様子である。これを見て検察官はほくそ笑む。ついでに言えば、この検察官は白人女性であり、裁判官は黒人女性である。つまり、この裁判で主たる役割を担っているのはすべて女性なのである。この映画は、女性たちが前景化される女性映画 (women's film) と言えるであろう。

証人は、被害者が殺害されたときには、自分はシャワーを浴びて髪を洗っていた、と証言する。さらに彼女が、その日は家に帰る前にパーマをかけた、と語ると、それまで要領を得ない質問を繰り返していたエルが俄然攻勢に転じる。彼女は、パーマをかけたあとに十分な時間を置かずに髪を濡らすのは厳禁なのに髪を洗ったと言っていること、さらに、それにしてはパーマが損なわれていないことなどの証言の疑問点を次々と暴き、一気呵成に証人を問い詰める。たまたらずに証人は、父親が自分と同じ年の女性と結婚したことに我慢がならなかったこと、ブルッ

クだと思い込んで過って父親を撃ってしまったことを思わず口走ってしまう。あたりが騒然となる中、証人は殺人容疑で拘束され、ブルックに対する訴追は取り下げになり、彼女は即座に自由の身になる。

かようにエルは、プール係の証言をファッションの知識を用いて覆したように、ここでも検察側証人の証言を美容の知識を駆使して覆す。言わば法的審理の場に、「馬鹿な金髪美人」が得手とする「知の体系」や「論理」を持ち込み、独自の「見事な法理論」を駆使することにより、勝利を勝ち取るのである。法学生という、法の世界では未だ力も権威も持たない「弱者」であるエルが、持ち前の知恵と戦略で法のエキスパートたちを凌駕する快挙を成し遂げるという点で、彼女は道化の眷属とも言えるトリックスターを想起させる。トリックスターは、弱者といった負の属性を付与されているにもかかわらず、知恵と戦略で自分よりも強い者をやっつけるいたずら者とされる（小川 58-59）。エルも、その「馬鹿な金髪美人」的な容姿と振舞いゆえに法曹界においては劣位かつマージナルな位置に置かれながら、一方でそれらの属性によってその世界の秩序や規範を挑発し攪乱する「いたずら者」であり、また法曹には無縁のファッションや美容といったサブカルチャーに関わる知恵と戦略を駆使して、ロー・スクールの教授や検察官などの「強者」を出し抜きその鼻を明かすトリックスターなのである。

おわりに

目覚ましい活躍をして法廷をあとにしたエルにワーナーが駆け寄り、臆面もなく次のように言う。「君は法廷でとても輝いていた。ぼくが間違っていた。君こそぼくが求める女性だ。君を愛している」。これに対してエルは言う。「あなたがそう言ってくれるのをずっと待っていた。でも私が30歳になるまでに法律事務所パートナーで共同経営者になるのなら、あなたみたいな大まぬけじゃないボーイフレンドが必要なよ（But if I'm gonna be a partner at a law firm by the time I'm 30, I need a boyfriend who's not such a complete bonehead.）」。明らかにこの最後の言葉は、かつてワーナーがエルに言い放った「もし30歳までに上院議員になるのなら、マリリンじゃなくジャッキーのような女性と結婚しなきゃならない」に対するしっぺ返しであろう。

そしてエルは実際に、「大まぬけ」ではないボーイフレンドを見つけている。物語の掉尾を飾るロー・スクールの卒業式のシークエンスの最後に、エルを始めとした主要な登場人物たちに関する情報がエピローグ的に字幕で伝えられる。それは次のような一節で締めくくられる。「エメットとエルは2年間つきあっている。エメットは今夜、エルにプロポーズする予定である」。既述のようにエルは女性たちとの絆を深めていくが——字幕によれば、エルとヴィヴィアンは最も仲のいい親友になっている——かといってヘテロセクシャル・ロマンスを拒絶しているわけではないことをこの一節は示唆している。もともと以前とは違って、エルにとって男性とのロマンスの成就是、キャリアの追求や女性同士の絆などと並立する人生における有意な

もののひとつということなのだろう。

ここまで見てきたように、ファッションと美容で磨き上げられたエルの容姿は、フェミニストたちが言うような、男性によってエロス化され欲望され消費される客体ではなく、主体的な自己表現、存在証明であり、また力や新たな可能性と機会をもたらすものと言える。この意味でエルという女性像は、「ポストフェミニズム的」と形容しうるかもしれない。実際、「ポストフェミニズムは女らしさを、女性が力を得ることに、またかつてのリベラル・フェミニズムやラディカル・フェミニズムの分析とは対照的に、女性としての偽りのない在り方に通じる回路である主張することにより、容姿の美しさに対するフェミニズムの批判を覆すのである」(Genz 125)。また、ポストフェミニズムという語は用いていないものの、ダイアナ・クレインは『キューティ・ブロンド』のリリースの1年前に出版された著作において、若い女性たちの間に見られる女らしさやファッションの捉え方のひとつの傾向について興味深い指摘をしている。

近年、一部の著述家たちは、十代や二十代の女性たちがヘゲモニーを握る女らしさ (hegemonic femininity) を、中年女性やフェミニストが解釈するのは違った形で捉えていることを示唆している。彼らは、ファッションに対するフェミニズムの批判はもはや意味のないものになっていることを示唆している。若い女性たちは、ヘゲモニーを握る女らしさと結びつくイメージを、弱さや受動性を表すものではなく、自らのセクシュアリティを「管理している」(“in control” of their sexuality) ことを表すものと捉えていると言われる。(206)

エルの容姿、及びそれを維持するためのファッションと美容への並々ならぬ気配りも、「ヘゲモニーを握る女らしさ」を具現するものであろう。エメットとのロマンスの成就も、彼女がもはや男性にとっての性的欲望の客体ではなく、「自らのセクシュアリティを管理している」ことを暗示するものなのかもしれない。

『キューティ・ブロンド』は、名門ロー・スクールを舞台にして、「馬鹿な金髪美人」というステレオタイプを体現するようなヒロインが、様々な試練や難局を乗り越えてハッピーエンドに至るフィールグッドなコメディと受け取られがちな映画である。しかし、以上見てきたように、この映画には、フェミニズムの理解を超えた女性の新しい在り方や可能性の地平が提示されているように思える。この意味で『キューティ・ブロンド』は、ポストフェミニズムの女性の物語の系譜に連なる作品と見なすことができよう。

注

- 1) ローラ・マルヴィによれば、「男女の不均衡によって秩序づけられる世界においては、見ることの快楽は、能動的／男性、受動的／女性に分割されてきた」(33)。

フィルモグラフィ

Legally Blonde. Dir. Robert Luketic. With Reese Witherspoon and Luke Wilson. MGM, 2001.
[『キューティ・ブロード』のDVDは20世紀フォックスホームエンターテイメントジャパン(2005)を使用]

引用文献

- Bates, Brian. "The New Blonde Bombshell." *The Guardian*. 29 Jul. 2001. Web. 14 Feb. 2018.
Burton, Laini Michelle. *The Blonde Paradox: Power and Agency through Feminine Masquerade and Carnival*. Diss. Queensland College of Art. Griffith U, 2005. Web. 30 Jan. 2018.
Crane, Diana. *Fashion and Its Social Agendas: Class, Gender, and Identity in Clothing*. Chicago: U of Chicago P, 2000.
Genz, Stéphanie. "Under the Knife: Feminism and Cosmetic Surgery in Contemporary Culture." *Women on Screen: Feminism and Femininity in Visual Culture*. Ed. Melanie Waters. New York: Palgrave Macmillan, 2011. 123-135
Mulvey, Laura. "Visual Pleasure and Narrative Cinema." *Issues in Feminist Film Criticism*. Ed. Patricia Erens. Bloomington: Indiana UP, 1990. 28-40
Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam: North-Holland, 1984

- 赤坂 憲雄 『異人論序説』 砂子屋書房 1985
ウィルフォード, ウィリアム 『道化と笏杖』 高山 宏訳 晶文社 1983
小川 了 『トリックスター—演技としての悪の構造』 海鳴社 1985
高橋 康成 『道化の文学』 中央公論社 1977
山口 昌男 『宇宙の孤児—演劇論集』 第三文明社 1990